

手島繁一さんへのメッセージ(到着順)

1969 年 北大 入学 1973 年 北大経済学部 卒業 千葉市在住 木村和広

手島さんの 北大学連委員長、全学連委員長としてのご活躍、経済学部中心の飲み会への気軽なご参加、私自身も執筆しました『北大1969』の出版責任者としてのご指導と いつも 私達の先頭に立って 生涯を全力で歩まれたと思います。

どうぞ ごゆっくりお休み下さい。

「手島繁一さん偲ぶ会」へのメッセージ

2025 年 6 月 1 日 中道育夫

突然の訃報に絶句、言葉を失いました。手島先輩と 55 年ぶりに念願の再会を果たした 2022 年 4 月の「北大 1969 出版記念の集い」では、あんなに元気だったのに！彼の 2023 年の年賀文面には「死ぬまでに会いたいと願っている友は幾人かいるのですが、あなたもその一人でしたから、もはや死んでも良いとは極端ですが、ま、そのぐらいの気持ちでした」とありました。私はお互いにまだ話し足りないと感じ、同年 9 月に上野君や福島君を交えて再度お会いしましたが、その時もすこぶるお元気でした。

私と手島先輩との出会いは 1967 年北大教養部自治会執行委員会です。私が北大に入学して何も分からない時、彼は文部省が大学立法を制定し大学と恵迪寮の自治が崩壊の危機に瀕していると教えた。引っ込み思案で内気な私（今では誰も信じてくれませんが！）は、その年の 10 月自治会副委員長に選出され、下手な立て看板、アジビラ原稿とスッティング、教室でアジテーション等を行った。駅前の電車通りでデモ行進を行い、大通公園テレビ塔下で零下 16 度での抗議集会を今も鮮明に記憶している。その間、私は世界観や人生観を勉強（本来の教養部授業をほぼ放棄）し自らの生き方を決めた。しかし、同僚の中川君がスッティング中に死去し、ブントの八十島が自殺し、大学立法反対運動が全共闘の革命路線を巡る派閥の暴力的な闘争に変質し、私に職業革命家は無理と自覚した。同時に、私は社会人として自立し、自らの生計に関係のない社会奉仕活動の一つだけ実行することを決意した。

北大卒業後は建設コンサルタント会社の技術者として勤務する傍ら、労働組合の委員長、町内子ども会・野球部の監督、大規模新興住宅団地の自治会長、岐阜県多治見市の市議会議員（保守系議長を含む）、ええ国つくろう市民の会・事務局長、安保法制反対のための東濃・可茂市民連合・共同代表などを務めた。現在は一市民として行政を監視しつつ、門外漢ですが政治が混沌とする中で佐々木毅の「政治学講義」を勉強する日々を過ごしています。

このように北大教養部で学んだ事が私の人生を決定づけました。特に手島先輩の指導に大きく影響を受けました。私にとって彼は人生の恩人であり、北大教養部は我が心の故郷です。もうお会いできないのが誠に辛く残念ですが、手島さまの御冥福をお祈りいたします。

手島繁一さんを偲んで

江見清次郎（1967 年理類入学）

手島さんの急逝を聞いて驚きました。私は 1948 年生まれですが、手島さんは一つ上だったのではないかと思います。

私が初めて手島さんに会ったのは”大学紛争”が始まって間もない頃のある会でのことでした。彼が学習会の講師を務めることになっていたのですが、かなり遅れてやってきたことを思い出します。学生運動に忙殺されて遅れてきたのだろうか。彼の話は切れ者の話でいつもみんなを納得させるような話でした。北大の学生の中で道外の人たちが目立っていたが、北海道出身者にもこのような学生がいるのだと嬉しくもなった。

その後法政大学に勤められたので直接見聞きすることはなくなったが、慶子さんと結婚されたということを聞き驚きました。私は慶子さんとは理学部学生自治会活動での知り合いであって一緒に活動したり、いろいろ議論したりした関係であったのです。だいぶん経ってから彼女から手紙が送られてきて、彼女の考えを知ることができました。そして、「蒼空に梢つらねて」発刊の集いではお二人が運営に携わっているのを見てきました。刊行物「北大 1969」などでは手島さんは編集の中心におられて主導されていたので、今回の逝去は残念でなりません。

手島さんと美ヶ原高原

石塚秀雄

手島さんは古代マケドニアのアレクサンダー大王のような顔をしていると、私は会うたびに思ったものだ。アリストテレスから教わっているのと同じ人のような知的で威厳のある顔である。いつだったかある日近くまで来たからといって、信州安曇野の我が家に立ち寄られた。私は手島さんを誘って美ヶ原高原にドライブに行った。当時私は「美ヶ原高原の自然を守る会」の会員だったのである。季節は六月だったか、少し雲があったので、もしかしたらなにも見えないかもしれないと心配したけれども、北アルプスをなんとか一望できたので私はほっとした。手島さんはその立派な横顔をもって、山頂付近の冷たい風の中で、しばし美ヶ原高原からの全景を眺めていた。その後しばらくして年賀状だけの挨拶になってしまったが、手島さんが亡くなられたことを知って、同い年の私としては感慨深いものがある。

北見市 腰岡雅昭

手島さんとご一緒させていただいた時間は短かったのですが、私にとってはとても 1 学年上とは思えない、尊敬する“まぶしい”先輩でした。

仲間から親しみをこめて「麿」と呼ばれ、“天性”のリーダーシップをお持ちの方でした。

手島さんが東京にいったからはお目にかかる機会がありませんでしたが、パートナーの北井慶子さんとは卒業後も親交がありました。結婚されたときは心から祝福させていただきました。ご逝去の報に接したときは驚き、北井さんの思い出を綴ったお悔やみのお手紙を差し上げました。手島さんにとってパートナーを失ったことはとても悲しく辛いことだったと思います。

手島さんからは「札幌に来たら飲もう」とお声をかけていただいていたのですが果たせないうままお別れを迎えてしまいました。悔いが残ります。

心からご冥福をお祈りします。

手島さんと最初にお酒を飲んだのは、1990 年代初頭の「出雲の事業団総会」の時、「協同総合研究所の常任理事」と紹介されたので、みんなで歓迎会をしたのを覚えている。

入所してからは、少なくない文章を『協同の発見』誌に足跡を残している。

<http://www.e-kyodo.sakura.ne.jp/tejima/index.html#kyodo250322-1>

その後、彼が担当したのは、「ホームページの開発（G I C R・O R G 通信協同総合研究所のWEB）」だった——2001 年 2 月～。

<http://www.e-kyodo.sakura.ne.jp/tejima/index.html#kyodou250305-4>

私は 1970 年前後、中林賢二郎先生（法政大学社会学部）の「どうどうめぐり研究会」に学生時代から参加し、手島さんが法政大学大学院社会学研究科に入学してきたときには、労働旬報社編集部にいたので、名前を聞いていた。

研究所の時期に覚えているのは、あまり発言をしなかった姿の割には、有志が集まった「荻野目会」（ILO 東京事務所、荻野目洋子さんのお父さん）というグループが主催した飲み会、花見会、温泉探索では率先して企画していたことだった。

「北海道」帰郷後、手島さんが編集した『蒼空に梢つらねて、イールズ闘争 60 周年・安保闘争 50 周年の年に、北大の自由・自治の歴史を考える』（2011 年 2 月）本をWEBに載せまじょうと、話したことから「手島繁一のページ」を編集・制作してきたが、中座せざるを得ないことになりました。

<http://www.e-kyodo.sakura.ne.jp/tejima/index.html>

インターネット事業団 <http://e-kyodo.sakura.ne.jp/>

中本和秀

わたしは、70 年入学で、「遅れてきた青年」世代です。手島さんと話をしたのは一度だけです。そのとき、「北大全共闘は、なぜ封鎖とかしたのか？ 目的は何だったのか？」というわたしの問いに、手嶋さんは「大学解体」というスローガンだったことを教えてくれました。今でもあの頃のことを考えるヒントをくれたように思います。感謝とともにご冥福をお祈り申し上げます。

手島繁一さんを偲んで

鷺谷 徹(わたしに てつ 中央大学名誉教授)

私が手島繁一さんと知り合ったのは 40 年以上前、現代労働問題研究会という若手研究者の研究会においてです。同研究会は当初、東大、早稲田大の学生・院生を中心に組織され、私は初期のメンバーだったのですが、次第に輪が広がっていき、法政大、専修大の院生も参加するようになり、手島さんもその一人でした。毎月 1 回の研究会で、多いに学び、多いに論じ、多いに呑んだものでした。手島さんはいつもカッコよく、かつ鋭く論じていたことを覚えています。同研究会は 1990 年代に活動を終えますが、その後も、学会などでの交流は続きました。

手島さんと最後にお目にかかったのは 2023 年 12 月 13 日に行われた、東大闘争の天王山の一つであった 55 年前の同日開催された東大駒場代議員大会を記念するシンポジウムの会場でした。私は当事者の一人として参加し、手島さんも遠路はるばる駆けつけてくれました。久しぶりの邂逅に大いに感激したものでした。また、小生は北海道日高地方で、

毎年フィールドワークをしていることもあり、そこでの再会を約して別れました。それから1年足らずでの悲報、残念の極みと言わなければなりません。手島さんの思いをどれだけ引き継ぐことができるかわかりませんが、労働問題研究者として、もう少し言論活動を続けるつもりでおります。手島さんのご冥福をお祈りしつつ。

君嶋義英

手島さんへの手向けとして、下記の北大アーカイブを送らせて頂きます。

北大百年史通説、1142-1209、「戦後改革と大学紛争」1982年7月25日

史料(7) 申し入れ書 p. p1183-1184

史料(14) 大学当局への要求 p1188

史料(23) 申し入れ書 pp. 1194-1195

いずれにも代表者として北大学連執行委員長 手嶋繁一の名があります。

もうすでに御存知の内容かも知れませんが、北大学生の代表者としての手嶋さんを思い返したいと思います。

人生の最良の友・手島繁一さん

木下武男(労働問題研究者・元昭和女子大学教授)

一九七二年、手島さんが法政大学の大学院に入ってきた。大学院は社会学部系であり、法政の社会学部は労働者教育の中央労働学園を引き取ってできた。だから、ほとんどが左翼系の教員だった。院生もそこで学びたいために入ってきた。だから、手島さんが全学連の委員長だったことは知っていたが、特別視はされず、彼も自然にとけこんでいた。

私は彼と気が合った。彼がよく言う「機敏な判断、素早い行動」のように、彼は判断が速く、また喜怒哀楽も抑えつつも率直に気持ちをだす方だった。当時、社会労働運動の六〇年代の高揚も終わり、ソ連・東欧の社会主義も崩壊した。激変の時代だった。議論はつきなかった。よく飲み、よく議論をした。

また、大学院の生活は、激しい学生運動の毎日をおくった者にとって、ぼっかり現れたゆとりある時期でもあった。手島さんとはよく「室内遊戯」やテニス、スキーを楽しんだ。独り身の手島さんはよく我が家に泊まった。

息子が小学校低学年のころ、朝起きると「手島おじさん、泊まったんだ」といい、学校に行った。彼が学校から帰ってきててもまだいる。しかも、次の日も泊まる。飲み話した後の二泊三日の滞在だった。

手島さんは札幌に戻り、結婚した。その間はときどき東京に来たとき会う程度になった。その彼も独り身になってしまった。私は、人生最後の方は、また手島さんと一緒に飲み食い、しゃべることになるだろうと、勝手に思っていた。手島さんに「東京に戻ってきなよ」とよく言っていた。去年の夏にもそういった。彼は「うーん」と答えた。それが彼の最後の言葉だった。人生の最良の友を失った。

乾彰夫 元全学連中央執行委員・東京都立大学名誉教授

手島さんに初めてお会いしたのは全学連中央執行委員会の場でした。その後、手島委員長時代を含めて1年半あまりを全学連書記局メンバーとしてご一緒しました。手島さんが委員長を務められた時期は、早乙女さん、松尾さん、西田さんら68-9年の大学闘争を指導した多くのメンバーが退任したあとで、また書記局が困難な事態に直面していた、特段の苦勞の多い時期でした。

全学連退任後、法政大学大学院に進学され、同大学社会学部非常勤講師をされていた頃、ちょうど私も法政大学文学部に勤めるようになり、授業の合間などに講師室でしばしば顔を合わせるようになりました。学期の終わりに一緒に打ち上げをしたり、夜行バスでスキーに行ったり（お互い若かった）、いろいろ楽しい思い出もあります。札幌に戻られて以降も、私が訪札のたびに、一緒に飲むなどの機会を設けていただきました。

東大闘争50年を契機に当時のメンバーで当時の資料収集をはじめましたが、その際には『北大1969』など手島さんのお仕事には、大いに励まされました。一昨年12月、私たちの資料収集報告会に札幌からおいでいただき、翌日に本郷3丁目のレストランで昼食をご一緒したのが最後になってしまいました。『北大院生協議会史』出版記念会にお招きいただき、そこでお会いできると楽しみにしていたところに突然の訃報、言葉を失いました。安らかにお休みください。今ごろ、奥さまとご一緒でしょうか。

手島繁一さんを偲ぶ会によせて

所 伸一（1971年教育学部卒）

手島さんが亡くなられたとのこと。寂しくなります。最後にお会いしたのは7年前、飯沢君の葬儀のときだったかと記憶します。かつて僕は手島さんと同じ教育学部の教育史ゼミでしたが、ゼミの場で会ったことも勉強の話をしたことも思い出にありません。彼は、竹田正直先生と山岡憲君からのまた聞きでしか知らない、僕には伝説の存在でした。しかし、一つだけ思い出があります。それは1969年の秋だったか、理学部大講堂で開かれた北大学連の集会で彼が委員長として締めめの挨拶でスターリンのソビエト学生運動の指導者への演説の一節を引用し、自治会代表で出ていた我々に対する「檄」としたことです。僕には違和感として残ることになりました。その後僕が大学院入学以来たまたまロシア教育史を研究しているため尚のことか、あの手島演説の記憶は消えることはありません。私の一般化ですが、学生自治会運動というのは、学生に社会認識や社会的スキル、実務能力などを訓練するサークル活動に近いと思います。輝いておられた手島さんのご冥福を祈ります。2025年5月

手島繁一氏を追悼するメッセージ

2025年5月3日 竹下書朗

学生運動で素晴らしい活動をしていた手島繁一氏が、心機一転、法政大学大学院に進学して研究者の道を歩み始めた。その道は多難、生活の資を稼ぎながら、高い志を抱いてほんとうに粘りづよく一步一步研鑽を積んでいく。その姿に感動し、その努力が実ることを願い、陰ながらエールを送りつづけた。

東京での研究生活は、指導教授の急逝、不安定な研究環境などが重なり、不本意な結果になったかも知れない。

しかし、北海道へ帰ってからの新たな活躍は瞠目すべきものがある。経験した学生運動史の立派なまとめや社会運動史上の新事実の掘り起こし、そして何よりもかつての傷ついた仲間を慰労する全国行脚。——何度も東京からの長距離電話でその苦労話や楽しいエピソードを聞かせてもらった。同じような境遇にあるわれわれはいつもお互いに励まし合ってきた。

手島氏の優しさと温厚な人柄、一貫してものごとに取り組む誠実な態度、どんなに危機的な状況に置かれても逃げ出さず打ち砕かれず打開するために奮闘する勇氣、いま求められている知的道徳的なイニシアチブを発揮してひたむきに変革を追い求めた手島氏を心から讃えたい。これからさらにいろんな社会運動史について研究意欲と情熱を示していただけに突然の旅立ちは誠に残念と言うほかはない。敬愛する同志よ、奥さんと両親の傍らで安らかに眠りたまえ。共通の恩師から託された組織論の研究〔運動と組織、哲学と組織の弁証法的関係〕を私もひきつづき追求していくつもりである。

「手島繁一さん偲ぶ会」へのお悔やみと連帯のメッセージ

野村俊幸（元北大全共闘教養部クラス闘争委員会（C 闘委）・北大ベ平連、
函館市在、社会福祉士・精神保健福祉士）

手島繁一様の訃報に接し、とてもショックで、残念でなりません。北大学連はもとより全国の学生運動の先頭に立ち、その後も社会変革に情熱を注いだ生涯に、心から敬意を表しますとともに、どうか安らかにお眠りください。

私は「北大1969」第二章の手島さんの力作『私論「北大紛争」』34 ページで、「入学式粉碎闘争のリーダー」として紹介された野村某です。C 闘委にはもっと優れたリーダーたちがいましたので、光栄ですがこれは過分な評価で恐縮しています（汗）。

残念ながら当時の歴史的条件下で、バリケードを挟んで対峙することになりましたが、半世紀余りを経て「北大1969」の出版にも触発され、私も当時の運動の総括の必要性を痛感していました。折よく、河西英通先生のコーディネートにより「北大1969」の編集を担った手島さんたちと私たち全共闘経験者が7名で、2022年にオンラインによる意見交換会を6回ほど持つ機会があり、とても大きな学びの場になりました。その際に手島さんから「あなたたちの北大闘争の記録を残してください」と励まされたことが大きな力になり、とても感謝しています。

そして2023年春に、1970年前後の北海道の全共闘やベ平連運動の記録を残そうと15名で編集委員会を立ち上げ、私も手島さんの声に押されたこともあり参加しました。おかげさまで予想を超える多くの方々のご協力を得て、2024年夏に478ページの大冊「極北の全共闘」を出版することができました。

本書は回顧録としてではなく、当時の状況や運動を多角的に検証し、教訓を後世に伝えることを目的としました。そして、当時の諸課題が現在にも継続しており、私たちのその後の人生を大きく規定したという思いを「あの時代と私たちの55年」というサブタイトルに込めました。

さらに、北大闘争だけでなく、他大学の闘争や北海道の環境運動の原点ともいえる伊達火力発電所建設反対闘争と環境権訴訟、埋もれかかった高校生の闘争や入管法改悪反対を担った華僑青年闘争委員会の記録を収録し、当時民青で活動していた方や反全共闘の一般

学生だったという方からの投稿もいただきました。このような40編を越える手記のほか、北大本部パリケード死守闘争の裁判記録や1970年に発刊した写真集「北緯43度荒野に火柱が」からの写真収録など、資料価値の高いものになったのではないかと思います。

権力の厳しい弾圧があったことは確かですが、当時の私たちの思想や理論の未熟さから運動が政治的に急進化して全共闘が解体したことを、私はずっと心に留めてきました。さらに一部の新左翼セクトは内ゲバ殺人や粛清、爆弾テロも厭わないカルト集団化したのは何故なのか、問い続ける必要もあると考えてきました。

また、「私たちの55年」について、私の場合は娘二人の長い不登校経験を基に30年余り不登校やひきこもりの相談支援活動に関わり、ライフワークとなりました。たくさんの方々にご支援とご協力をいただきましたが、共産党の方々は特に心強い味方になってくださいましたし、この課題はもとより社会の変革を目指して熱心に活動する姿に感銘を受けています。

私はいわゆる「中道リベラル」のスタンスなので共産党と政治的立場は異なりますが、競争と抑圧、格差拡大や戦争への危険性が増す社会を変えることは全共闘運に関わった者の責務であると考えていますので、手を携えて進んで行けることを願っています。

できれば会に参加し語り合いたいですし、実行委員長の吉田万三さんとは教養1年のときに「安保問題研究会」で一緒しましたので再会したかったのですが、北大時代から同志であった妻が4月に死去したばかりで喪中ということもあり、残念ながら出席を控えさせていただきました。

本日ご参加の皆様が手島繁一さんの思いを受け継ぎ、益々ご活躍されることをお祈り申し上げます。お悔やみと連帯のメッセージといたします。

太田貞司（神奈川県立保健福祉大学名誉教授）

昨年の12月、佐々木忠さんからの手島繁一君の訃報はとても信じられなかった。それは、昨年8月、学会で札幌に行くことがあり、学会終了後、佐々木さんの声掛けで、札幌駅近くの居酒屋で手島君、高田純君と4人で会おうということになり、久しぶりに歓談し、元気な昔と変わらぬ姿をみたからある。その夜、彼の専門であるイタリア政治など終電まで話し込んだ。

手島君を「君」で呼ぶのは、実は私たち1966年北大入学の同級で、しかも同じ教養クラスの2組だったからである。同じクラスに旭川出身の松浦武二君（昨年死去）がいて、入学後すぐに3人は意気投合した。当時私は、北大正門前の喫茶店トリコロールの隣の中華店の裏にあった“不法本造4階建てアパート”「共栄社」に住んでいた。格安家賃1500円の中2階の3畳間が私の棲家であった。そこに3人が集まりよく話をした。手島君は高校時代から「政治活動」に関心を持っていたが、すでに方向を決めていた松浦君とは違い、彼はその頃まだ、どの「路線」を選択すべきか、私と同様に思い悩んでいた。私も心を決めかねていた。

最後になった昨年8月の夜は、彼は、3畳間で話し込んだ当時の思い出を話してくれた。1966年7月ごろだったか、レーニン全集を買おうか買うまいかななどの話が始まり、

アパートの3畳間まで長時間話し合った。そして私たちの「路線」を決めた。その後の彼の自治会、全学連での活躍、そしては語る必要がないだろう。

彼は、私が言った一言が、彼の次のステップに向かう、背中を押したきっかけでもあったと話してくれた。でも私はその一言を覚えていない。次に会ったら何と言ったか聞いてみたいと思いながら電車でホテルに帰ったが、それも果たせなくなった。

今手元に昨年8月皆で写した写真で彼の顔を見ているが、教養1年当時の写真はなく、どんな様子か思い出そうと思い、我が家にある、彼の出身高校である札幌南高校の卒業アルバムを引っ張り出して、北大入学1年前の写真を見てみた。その卒業アルバムが我が家にあるのは、私の妻が、彼と高校の同級生であったからである。その写真を見ると、きりっとまっすぐ前を向いている姿があった。手島君とは、専門が異なるが、何度か卒業後会っていて、彼の歩んだ難しい困難な状況をうかがい知ることができた。

彼の人生は、卒業アルバムの写真に写っている姿のように、きりっと前を向いて生き抜いたものに私には思える。合掌

手島繁一さん追悼・献辞に向けた前奏的メッセージ

—健康・食事への配慮とアウトドア活動—

山口博教

手島さんと個人的に話す機会は、編集委員会の前後の時間、特に終了後の飲み会やそこに行くまで歩いている時などである。飲み会で聴く手島さんの話は含蓄が深く、いつも楽しみにしていた。話しているうちに昔の記憶がよみがえるのか、ゆったりと語るその内容にいつも刺激されることが多かったらである。

また『北大1969』刊行後に、編集委員会の打ち上げ会が2021年11月8・9日に、知床第一ホテルで行われた。このホテルは編集員長の上野さん一家（次兄）が経営していることを以前から聞いていて、編集委員一同が是非行って見たいと考えていた。車3台（菊地車・岡車・山口車）に7名が分乗し出かけた、一泊二日の旅行であった。私の車には佐々木さんと手島さんが乗り、私と佐々木さんが交代で運転した。片道8時間半の道中で、往復の車内でいろいろ雑（飲）談をした。また手島さんは根室生まれでこの近辺の地理や土地柄に詳しいため、いろいろ解説をしてくれた。（注1）

さらに『北大大学院協議会史』刊行後の打上げ会は、2024年11月4・5日に糠平温泉で行った。この時岡車と私の車2台で行き、帯広市在住の明神さんが予約した、糠平湖そばにある地老舗の中村旅館で合流した。ここは明神さん馴染みの、戦前から続く老舗旅館であり、おかみが丁寧に接待してくれた。団体客を専門とした先代の昔話と最近個人客相手の経営に切り替えた経緯を伺った。この時手島さんは私の車に同乗しなかったが、旅館では私と同部屋となった。

どこで、いつ話したのかは正確に覚えていないが、手島さんは寝るときはいつもレッグ・ウォーマーを履いていると聞いた。付けないと寝ている時に脛にこむら返りが起きるから、ということだった。それを聞いて私も、70歳を超えた頃から、特に寒い冬の晩から夜にかけて足が吊ることが多くなっていたため、手島さんに倣ってレッグ・ウォーマーを購入した。それまでは女性が身に着けるものだという固定観念があり、またどこで入手するか分からず女房に相談した。最終的に我が家で定期購読している『通販生活』に申し込み購入した。とにかく70歳を超え後期高齢者に分類される昨今は血液循環が衰えるた

め、体全身を暖かくしておくことが大事であることを思い出した。ちなみに私は以前から腰痛再発防止のため、フーテンの寅さんに倣い腹巻だけは付けていた。（注2）

手島さんの場合には連れ合いが亡くなり、真駒内のアパートで一人生活を始めた時には親戚の叔母上がいて生活相談をしてもらっていたそうである。しかしその後その方が亡くなり、健康相談をする相手がいなくなってしまった、ということを知った。

また私の場合は歯が悪く、歯科医での定期的検診が欠かせない。（注3）年に一二度歯周病が悪化し、歯肉に炎症を起こすことを話した所、手島さんも自分の歯の話をしてくれた。既に総入れ歯であること、そもそも手島家は子供の時から一家そろって歯を磨くという習慣が身についていないため、こういう結果になったと。このため硬めの肉類はあまり食べられないことを打ち明けてくれた。おまけとして「歯が痛くなるのは、新陳代謝がまだ活発な証拠だよ」、と私に対する慰めのようなことを言ってくれた。

このことを聞いた後注意して見ていると、飲み会では確かに硬い肉類には手を付けず、野菜と魚を主として食していた。ラーメンサラダと焼き鮓（ホッケ）が好みでいつもオーダーし、私が幹事役の時は最初の注文で必ずこの二つを加えるようにした。

またある時食事は一日に2回しか取らないとも話していた。これと同じことを詩人の谷川俊太郎氏が亡くなる前に新聞記事に書いていた。高齢期になると食べる量が減少するケースがあり手島さんもその一人なのだなあ、と思っていた。ただ今から思うと、単身生活で定期的に食事を取り、必要なカロリーを摂取していたかどうか不明である。

登山は若いころから始めていたようで、逝去後に資料の収集・整理で弟さんの明夫氏の立ち会いの下で手島住居を訪れたところ、山岳関係の大量の本が書棚の一番上から2〜3段並べられていた。本州と北海道の山双方に関するかなりの分量の書籍である。札幌の林游観光主催の山の会の会員で、道内各地の登山へ参加していたようだ。

2022年10月11日に、私も定山溪へ行く途中にある八剣山登山に誘われた。佐々木さんの都合がつかず二人で登ったが、細く峻険な道を手島さんは軽々と登っていったことが印象的だった。また私との会話の中で2023年か2024年に余市のシリパ岬を登った話が出ていた。一人で行ったのか、グループツアーに加わったのかは聞いていない。（2021年6月5日と2022年5月22日の筈狩りについては佐々木さんが書いているので省略する。）海での遊びでは初回2021年8月17日に、佐々木さんと三人で小樽の豊井海岸へ遊びに行った。（注4）パーベキュー・セットとアキレス製4人乗りゴムボートを私の車に積み、小樽駅で二人を迎えた。生協で食材を買った後、高島方面へ向かった。そこは札幌勢にはあまり知られていないが、小樽っ子や地元民には馴染みの海岸である。小さな湾になっているため静かで泳ぎやすいが、砂浜は一部しかなく水深がすぐ深くなるスキューバダイブにはもってこいの磯浜である。（注4）小砂利の波打ち際でパーベキューをし、ボートで沖へ向かった。ゴムボート漕ぎは御兩人ともあまり経験がなく苦労していたが、実に楽しそうであった。

手島さんがその翌日か翌々日に定期検診で病院を訪れた際に、医者から「すごく陽焼けしましたね」と言われたそう。本人も「このような焼けかたは三十年振りです」との感想を返したことを後で聞いた。2回目の2023年8月2日はこの三人で古平町の寿司店でお昼を取り、その後その近辺海岸で遊んだ。この時にはボート漕ぎが少しくまくなり、交代で漕ぎ30分位海岸に沿って往復した。

このように単身生活する中で、充分健康に気を付けていた面が伺えるのであるが、それと同時に今から思うと気にかかる点がなかったわけではない。

その一つは、体調不良で2冊の本の編集会議時（午後13時30分開始）に欠席連絡が入ることが、2～3度あったことである。「めまいがするから休みたい」と。また二つ目に朝早起きが苦手のように、午前9時から10時頃にスマホで電話を掛けると出ないことが多かった。ただし、11時か昼頃に先方からかかってくるので連絡は取れていた。特別夜更かしをしている雰囲気は感じられないため、恐らく低血圧のせいではないかと思われる。院協史編集委員会の打上げ時に同室だったことで、やはり早起きが苦手である様子が見て取れた。私は定年退職後女房に倣い生活を朝型に切り替えた。夜10時過ぎに就寝、朝5時前起床を原則としている。このためホテルでも6時前に目が覚め、気付かれぬようにそっと起き、温泉へ向かった。朝食で手島さんを除くメンバーが7時過ぎに食堂に集まり、早い人が食べ終わる頃にやっと手島さんが姿を見せたが、少しボーッとしていようだった。

以上のことと、亡くなる1年・2年前から会話中に次のような弱音を吐いていたことが今思い出される。「今年の冬を乗り切れるだろうか？」なんでこのようなことをいうのか私にはピンと来なかったのであるが、本人は真剣に考えていたことが今になって甦る。まさかこんなに早くその時（2024年12月2日深夜の「虚血性心疾患」による「突然死」）を迎えるとは予想できなかった。私たちが相談に乗れなかったことが悔やまれる。

最後に手島さん・佐々木さんと行きたかった二つの計画に触れておきたい。一つは、経済学部時代からの先輩である浅田さんが住む旭川へ出かけた。浅田さんは山岳部出身の登山エキスパートで、旭川大学を定年退職後ボランティアで嵐山ビジター・センターの小屋番をしている。『北大1969』刊行後2021年7月23日に、そこを訪問した。この時私は旭川大学で非常勤講師をしていたので、授業終了後旭川駅で手島・佐々木さんを拾い、山小屋へ向かった。そこで山の話聞いた後、浅田宅に行き、ギャラガー夫人を交え庭でバーベキューをした。帰路に就く前に北大時代の諸資料を譲り受けとり、『北大大学院生協議会史』への寄稿を依頼した。この時旭川山菜狩りの案内を乞う話が出された。もう一つは去年「櫻の名所である小樽の苗穂公園にまだ行ったことがないので、是非見てみたい」と言っていたことである。是非今年2025年春の花見に誘おうと密かに思っていた。

しかし双方とも実現できないうちに、手島さんは逝ってしまった。私も含め編集委員一同は菊池さんからのメールでこの件を知った後、正月を挟む1～2か月呆然として過ごした。そして年明け1月12日と19日に資料収集で故人の住居を訪れた頃から、やっと追悼会のことが話題となってきた。手島さんにはもっともっと聞いておきたいことがあったのに、それもできなくなってしまった。

文字通りの「残念」であり、今は故人の冥福を祈るしかない。

（注1）年が明けた2022年4月23日に知床遊覧船沈没事故が発生した。打上げ会でウトロに到着し他車が到着する前に、私は一人でウトロ漁港まで散策に出かけた。知床観光案内所と世界遺産センター内を見学した後、ゴジラ岩を見たりや漁船が停泊している海際まで歩いた。すぐその先に観光船乗車場があるとは気が付かなかった。楽しい思い出の場所であっただけに、半年も経ない時期に一転して悲惨な事故の初動場所となったことに驚き、嘆かわしさが一段と増したと感じている。

（注2）体を冷やしてはいけないことは、1998年大連外国語大学日本語学科へ交換教授で半年間赴任した時に中国の先生たちからアドバイスを受けた。当時中国ではビールも冷やさずに飲むのが習慣であった。また最近TVの「健康の時間」（日曜朝7時TBS放映番組）で、手先のしびれについての解説があった。人間の体は寒くなると、血液を能に優先的に送り込むため、手先等の末梢神経へ回る血液量が減少するのがその原因である。対策としては手足を動かし、マッサージをしたりして暖めることが大事であるという。このため寒さ対策で就寝時手袋をすることを考え、寒い晩に実行している。なお私の腰痛とその治療については、以下のエッセーにまとめた。「年末・年始の入院と腰痛治療—65歳直前、4週間の闘病記—」、拙著『いろいろあってドイツ経営経済学—東京、札幌、ベルリンから—』共同文化社（自費出版）、2018年2月、95ページ、及び同名のアマゾン電子書籍、22世紀アート、2021年にも所収。

（注3）私の歯が悪いのは、甘党のせいである。父の実家山口家の親戚は大部分が下戸で、私もその一人である。子供の時から歯科医通いが欠かせなかった。大学院時代には、北大の歯学部診療所で診察と治療を受けた。当時は無料であり、「治療については一切文句を言いません」とのサインが必要であった（今は学生も有料）。最初に担当教授が現れ、頭や顎の寸法を計測することから診察が始まった。「根の治療」が開始されたが、実際の治療は教授の指導下で助手が担当した。博士後期課程時に上歯肉に炎症が発生し、6本ブリッジを入れることになった。挿入後40数年経つが、今も使用中である。しかし2023年10月にその上の歯肉に良性であるが腫瘍（膿疱）が発生した。小樽の歯科医では手に負えず、医師が北大に連絡し診察を受けることになった。その結果手術で膿疱を除去することになった。2024年5月に1週間北大病院口腔内科に入院し、全身麻酔でオペが実施された。手術は無事終了し、何とかこのブリッジを取らずに済んだ。ただオペ時に開けた穴が未だにふさがらず、定期的受診は続いている。この後の編集会議と打ち合わせを私の受診日に合わせ、北大病院入院患者棟の1階にあるレストラン「ノースキッチン」で2回開催してもらった。この辺の事情は、そのうちエッセーに纏めてみたいと思っている。

（注4）ここは現役時代の終わりに近づいた頃、夏休みにゼミの学生や中国人留学院生を誘いよく行った海岸である。若い時は積丹半島の先まで行ってキャンプ等もしたが、50代半ばを過ぎ体力が落ち始めてからは、近場の小樽の海岸に切り替えた。この辺りについて以下のエッセーに書いた。「北海道の海と本と私—映画も合わせて—」、前掲拙著、144ページ。

（追記）このメッセージは、来夏刊行予定の手島さん追悼集の一部とする予定です。

わが友・手島繁一さんの思い出
最初の出会い

法政大学名誉教授 五十嵐 仁

法政大学大学院への進学を目指して社会科学研究科社会学専攻の合格発表を見に行ったときのことです。自分の名前を発見して喜んだ私の目に、見慣れたもう一つの名前が飛び込んできました。「手島繁一」と書かれています。「まさか、あの手島さんなのか？」と驚きました。

手島さんが法政大学の大学院を受験するなんて思いもありませんでした。しかも、入学してからは同じ中林賢二郎先生のゼミに属することになるなんて。もちろん、手島さんの名前は全学連委員長として以前から知っていました。私も大学1年生で都立大学A類目黒学生自治会の副委員長、2年生の時には委員長をやっていましたから。

でもそれは、集会などで遠くから仰ぎ見る程度のことでした。直接、顔を合わせて話した記憶はありません。その元全学連委員長が大学院での「同級生」となったのです。

しかし、その後も手島さんが姿を現すことはありませんでした。大学院学友会（自治会）の委員長となった私は、先輩に指示されて迎えに行くことになりました。下宿は戸越銀座のはずれにあったと思います。言葉を交わしたのは、その時が初めてでした。

それは1974年4月末のことです。以来、昨年末に急逝されるまでの50年の間、私たちはしばしば行動を共にし、飲み会などでの同席は数知れません。手島さんとは半世紀にわたってほとんど途切れることなく交遊が続くことになりました。

中林ゼミで

こうして、私と手島さんは中林ゼミでの同輩となりました。田沼肇・増島宏・高橋彦博・芝田進午・湯川和夫・江口朴郎・北川隆吉などの諸先生のゼミにも一緒に顔を出していたはずですが、授業での記憶はほとんどありません。しかし、それが終わってからの思い出は山のようにあります。

ゼミでも一緒に行った合宿などについては覚えています。千葉県の外房では海岸の岩の上で遊んだり、駒ヶ根で合宿して近くの千畳敷カールから宝剣岳に登ったりしました。東京でも奥多摩の御岳山の宿坊で合宿し、清里では飯盛山に登りました。どれも懐かしく楽しい思い出ばかりです。

中林先生宅での新年会なども楽しく思い出されます。中林先生がガンで急逝された後のゼミを引き継いだのが手島さんで、その後を私が受け持ちました。追悼文集『追憶 中林賢二郎』には、手島さんと私の連名で書いた「国際社会労働運動史研究について」が収録されています。

近畿大学での政治学会に参加したときのことです。懇親会で隣から出てきた手と養殖マグロの刺身を取り合う形になりました。それを見ていた手島さんが、後になって「あれ、丸山眞男だぜ」と言うのです。生前の丸山先生にお会いしたのは、あの時だけでした。

2人して遊びまわり、帰れなくなって先輩や後輩などに泊めてもらうこともありました。木下武男さん（のち昭和女子大学教授）、丸谷肇さん（のち鹿児島国際大学教授）、垣内国光さん（のち明星大学教授）など、新婚ほやほやのお宅にお邪魔して泊まったこともあります。今から考えれば、さぞ迷惑だっただろうと反省しています。

中林先生がイギリスでの留学から帰国され、手島・木下・私の3人で成田空港まで出迎えに行ったときのことです。喜んだ先生は土産に持ち帰ったスコッチのモルト・ウイスキー「グレンフィデック」をくださいました。

我々は早速、味見をしようと手島さんの下宿だった立川の「タンポポ荘」に行って宴会を始めたのです。手島さんは「せっかくだから。黨も呼んでやろう」と言い出しました。近くに住む後輩の黨高敏君に電話して呼び出したのは良かったのですが、彼が駆け付けたときには、すでにウイスキーは空っぽになっていました。黨君は不平たらたりましたが、「わりー、わりー」と頭をかく手島さんが相手では喧嘩にならないのです。

大原社会問題研究所での協働

大学院修了後、私は大原社会問題研究所の兼任研究員に採用されました。その後、助教授として専任研究員となり、やがて所長として勤務することになります。ここでも手島さんと一緒に働く機会がありました。私が研究所の業務として編集を担当していた『日本労働年鑑』を手伝ってもらうことになったからです。

『年鑑』巻末の「社会・労働運動年表」の「社会運動欄」の年表作成と本文の「社会運動の状況」の執筆をお願いしました。締め切り通りに原稿が出てくることはほとんどありませんでしたが、ぎりぎりで間に合うタイミングを見計らったように送られてくるのです。

研究所の一大事業として取り組んだ『社会・労働運動大年表』（労働旬報社）の「執筆者一覧」にも手島さんの名前が掲載されています。その後、私が編集責任者を務めた『社会労働大事典』の執筆にも加わっていただきました。全学連委員長としての実践経験もあり、社会運動についての目配りとバランス感覚は抜群でした。

仕事だけではなくありません。研究所の仲間とマイクロバスを仕立てて行ったバス・ハイクなども楽しい思い出です。手島さんが慶子さんと結婚されたとき、「お祝い」と山梨の新府桃源郷までマイクロバスで出かけましたが、時期が早すぎて桃の花は全く咲いていませんでした。雨も降りだして寒さに震えながら近くの温泉に入って帰ってきたものです。

手島さんに頼まれて、足立区長選挙で吉田万三候補の応援にも行きました。春休みには、新潟の私の実家に遊びに来たこともあります。木下一家などと共に田代スキー場までスキーにも行きました。流石にうまいものだと感心するような見事な滑りでした。

登山の思い出もあります。雪の高尾山から陣馬山まで縦走し、陣馬の湯で宴会をしました。北アルプスの唐松岳から不帰の嶮を通して白馬三山を経由し蓮華温泉まで3泊4日の山行では、途中の「天狗の大下り」で滑落しそうになって危ないところを助けてもらったこともあります。

北海道に帰った後も

手島さんが生まれ故郷の北海道に引き上げたのちも、私たちの交遊は続きました。講演などを頼まれて北海道に行くたびに手島さんや共通の友人である山本補将さん（専修大学北海道短期大学教授）に連絡を取り、一緒に一杯やったり出かけたりしたからです。

山本さんの運転で、水が自噴している京極の「羊蹄のふきだし湧水」に案内していただいたことが2回あります。1回は私の妻も一緒でした。手島さんと定山溪温泉に宿泊して一緒に大きな温泉に入りました。

芹澤寿良さん（元高知短大学長代理）、山本さんと4人で「天人峡温泉」に泊まり、ロープウェイで旭岳に上ったこともあります。妻と行くはずだったバス旅行の都合が悪くなり、手島さんに声をかけて積丹半島を一周したとき、「これを積丹ブルーというんだよ」と教えてもらいました。一緒に塩水ウニに舌鼓を打ったのも懐かしい思い出です。

2018年11月に北海道革新懇から講演を依頼されました。早速、手島さん・山本さんと連絡を取り、札幌郊外の水源池周辺や中島公園での紅葉見物に案内していただき、その後は市内で一杯やり、楽しい時を過ごしました。

2019年3月に佐方信一さんが亡くなりました。労働旬報社の元社員で『労働年鑑』の編集を担当していた親しい友人の1人です。たまたま大原社会問題研究所の創立100周年

記念のシンポジウムがあり、佐方さんの弔いを兼ねて手島さんが上京され、佐方宅を弔問に訪れたのち木下宅で追悼し献杯しました。

2022年1月に全商連札幌連合会の旗開きに招かれたときも前日にお会いし、翌日の講演を山本さん親子とともに聞きに来てくれたこともあります。その翌年の11月に私が講演で岩見沢を訪れたときにも札幌でお会いし、手島さんに北大の紅葉の名所を案内してもらい、所々で北大闘争の思い出についてお話を伺いました。

その年の12月にお会いしたのが、最後の機会となりました。東京で学生運動時代についてのシンポジウムがあって上京され、木下さん宅で一杯やりました。その翌日に八王子の我が家に泊まっています。これが手島さんとの半世紀にわたる交遊の最期となるなんて、思いもよりませんでした。

今はただ、冥福を祈るのみ

手島さんとの思い出は尽きません。書かなかったこともたくさんありますが、これくらいにしておきましょう。

私より3歳の年上でしたが、兄貴というより同輩という感覚です。年の差を感じさせないフランクさで付き合えた人でした。明るくカラッとしており、一緒にいて嫌な思いや気まずさを感じたことはありません。専門がイタリア政治だっただけに、本人も「ラテン気質」だったように思います。

多少アバウトなところもあり、遅刻したりしても憎めない人でした。遅刻といえば、私の米ハーバード大学留学中に手島・芹澤・佐方・川崎さんの4人で、四国旅行に出かけたそうです。この時、手島さんは遅刻して飛行機に乗り遅れています。また、研究所の仲間と一緒に高尾の桜保存林に出かけた時も遅刻し、途中でばったり出会ったということもありました。それも、今となっては懐かしい思い出となっています。

急逝の報に信じられない思いでいっぱいになりました。愕然とし呆然とするばかりです。早すぎる逝去はまことに残念であり、孤独で寂しい最期となったことは無念でもあります。

ただ、今となっては生前の友誼と厚情に感謝し、「安らかにお眠りください」とご冥福を祈るばかりです。

手島繁一さんを追送して

佐々木忠（1965年入学）

1 マロは、忽然と消えた

別れは突然に訪れる。明友・手島繁一、通称マロ（由来不明）との別れがそれだった。24年12月1日は、65年教養自治会委員長（66年道学連副委員長）の小口正持さん（享年80歳）の、偲ぶ会が札幌駅北口で開かれた。佐々木洋、松尾薫、宮下純夫、高田純など先輩後輩とともに参加し交流した。

しかし、その2日後には、往きて帰らぬ人となった。厳冬期の風呂場、洗い場で倒れているのが見つかった。僕が2日に当日の写真をラインで送るとすぐ既読になった。それから数日して要件あり2回電話したが、通じなかった。いつもはすぐに返信あるのに、なぜか返信が来ない、、、怪しいと感じた。

その後日、上野、菊池が会う約束に現れず、電話にも出ない、おかしいと真駒内の自宅に行く。徒ならぬ異状に不安が募る。

あんなに元気にしていたのに、、、諸行無常。門徒出の僕は、ひたすらに南無阿弥陀仏と祈るばかり。

冬季、特に北国の風呂場は恐ろしい。ヒートショック、死のリスクが極めて高い。そういえば、65年道学連委員長だった、鈴木徹郎もそうだった。用心、用心。

2 『1969』など北大3部作のリーダー

手島は、法政大学院、大原社研・協同総合研究所を務めて、20年ぶりに北海道・札幌に帰った。それまでの社会運動史的視点の研究、北星大学非常勤講師を進めるとともに、北大の戦後史研究を目指した。

手島はこの15年間に、『蒼空に梢つらねて』11年、『北大1969』21年、『北大院生協議会史』24年一を企画・編集した。これらを「北大3部作」と呼ぶなら、これら3部作を編集推進の確かな司令塔の役割を担ったといえる。（これ以外にも、「北大ピースガイド」や「北大もう一つのキャンパスガイド」いずれも19年、刊行されている）

『蒼空に梢つらねて』はそのサブタイトルにあるように、「イールズ闘争60年、安保闘争50年の年に北大の自由自治の歴史を考える」を目的にして、イールズ、60年安保、「大学紛争」の3世代を繋ぐものであった。

1) 『蒼空に梢つらねて』編集長として

そのあとがきは短いが、手島編集長の思いの丈が語られていると感じる。「歴史が現前して甦る瞬間」としてイールズ闘争の「首謀者」梁田政方との邂逅を挙げる。（06年）歴史を叙述し語り継ぐ営みは「歴史を遡及する旅の感動」を生む。「時代の全体的な雰囲気と、個々人の時代認識についての感覚」を重んじるという。

40人超の方が寄稿・証言した。現役を引退した僕は、00年5・16集会（イールズ事件60年）に参加し、先輩諸氏の青春を感じた。

『蒼空に梢つらねて』は、前年の集会の活字再現と、第2部として「時代と向き合っ—一当事者の証言」として34名の手記が語られた。北大民主化闘争の裏表が見事に表現された。これをやり上げたのは、手島編集長の、個人の尊厳、公正な感覚、が成し遂げたものであった。僕も編集委員の末席に連ねた。

2校目の時に、締め切りに遅れた原稿が提出された。しかし全く異質であり、半ば当時の運動を否定するものであったから「不掲載にすべし」が噴出し多数で分裂しかかったが、編集長と佐々木は「あえて掲載すべし」として皆の合意を作った。編集長への信頼が厚かったのだ。

2) 『北大1969』、400点の歴史資料

68～69年の「大学紛争」は、歴史的にも稀有な高まりを見せていた。北大でもクラス反戦の入学式粉碎の混乱を皮切りに「紛争」状態に。

全国的には、100近い紛争本が出ているが、9割近などが全共闘もの、自己顕示、承認欲求型である。しかし本書は、400点近い史資料を明示して展開されている。歴史として追想していくには、当時の資料と向き合い、記憶を再構成するベクトルが欠かせない。

手島ははじめにで「民主化闘争の位相が正當に評価されて来なかった」「当事者の回顧と証言、資料を基に北大紛争を検証し、更新する試み」という。民研わだち、あらぐさ、寮、生協などの活動も報告され、39本が寄稿された。

「原稿の中に写真を入れたが、その写真の最上部が重要なのにカットされた」との異議申し立て、発刊停止の要請あり。手島、佐々木が当人に平謝り、陳謝した。やっとのことで和解がなって事なきを得た苦い体験もあった。

3) 『北大院生協議会史』本邦初に

手島は、北大教育史ゼミから法政大学院に進んだ。しかし院教史は本邦初でもあり、手島の教育運動史論は不可欠だから、ぜひとも編集委員に加わってとお願いした。

なれない編集長・佐々木は「これはどう見たの編集委員の協同により」と再三、手島に尋ねた。

戦後の大学院歴史といい、科学技術政策史への批判的研究といい、内部異論もあり、難問があったが、十人十色の編集委員の協同により、乗り越えて24年9月、上梓できた。

その出版記念会は3月10日としていた。不慮の事故により手島の参加はできえなかった。どんなにか待ち望んでいたであろうに、、、あたかも、北大3部作の完成を見届けて逝ったが如くに忽然と永眠してしまった。これらは、手島の豊かな識見、逞しいけん引力がなければ成しえなかったといえよう。

3 積丹岳ねまがりだけ狩り、花の散歩道

北海道は、野草、樹木、山菜などの宝庫である。特に春の雪解けとともに野山は一気にめぶき、おがりだす。

僕は福井県の山奥で、木こり炭焼きの3男坊の成果、山菜採りが大好きである。

1) タケノコ狩り初デビュー

編集委員会の後の懇親会でたまたま山菜採りの話がでた。22年？体力に自信のある手島、山口(博)、佐々木の3人で、積丹岳ねまがりだけ(ちしまざき)狩りに出かけた。北海道で、タケノコ狩りといえば、細い根曲がりである。

二合目あたりで、登山道から分け入り、手本を見せる。手島らはすぐに飲み込む。1本見つけたらその周辺、1～2mをじっくり探索、枯葉を分けて探すべし、なかなか筋がよるしい。

次の年は、近くの北広島・仁井別で狩りに励んだ。取ってから早くに茹でる。手島は、みそ汁の具に、煮物にして楽しんでもくれた。

2) 小樽市祝津で海水浴、ゴムボート、BBQ

小樽住まいの山口(博)の誘いに、手島、佐々木が乗った。僕はゴムボートにしがみ付く。手島は、クロールも平泳ぎも見事に見えた。

子育て終えて、20数年ぶりの海水浴だった。潮風に裸を受けるのは気持ちがいいものだ。手島の笑顔が実によかった。

3) 礼文島など旅のツアー

手島は登山、野山のウォーキングも好きだった。手島夫妻は、旅が趣味だった。年賀状には、旅の写真が踊った。旅システムのツアーにも毎年参加してたようだ。

事故ののち、僕も手島文庫のかたづけに加えていただいた。東京近郊の山々のガイド本も多かった。また道内の本では、「北海道の百名山」「ほっかいどう山楽紀行」「北海道花の散歩道」「北海道花の名所百選」「新北海道の花」「さっぽろ花散歩」「北海道の湿原」「身近な樹木」などが並んでいた。

4 教養部自治会委員長、北大学連委員長

4千人の委員長……。手島は66年春、札幌南校から北大分類に入学した。日韓条約からベトナム反戦が燃えようとしていた。教養部自治会は二つ川健二委員長（深西）だった。手島ら1年生は、党派に分化した2年に対抗して、無党派を貫き「1年協」（1年生連絡協議会？）をつくり、独自性を発揮していた。しかし流石に秋風の吹く10月ころには分化を始めた。杉沢は革マル系に、など。問題は手島をどう引き付けられるかだ。

ようやく手島がわが方に来た時の安ど感、それは大きかった。2000人の1年生の中で傑出した才覚を感じさせていたから。

手島が委員長候補になって、B4・10ページの政策パンフ残ってるが、ひどく見づらいのが残念だ。人気だった手島は大差で勝利した。

手島は67年後期を、佐藤利久に譲った。

北大学連委員長……。手島は「北大紛争論」『北大1969』に書いた。北大学連委員長は、65年佐々木ギラウ、66年山口(×)、67年宮下純夫、68年手島となる。佐々木は68年農学部自治会再建委員長のあと、8月から1年間同盟活動に専念した。はじめ教養部ブロック委員会、69年3月から8月まで全学委員長だった。熱い中の貴重な1年だった。18班4桁近い員数を後方支援した

手島学連委員長が表舞台、僕らは縁の下で支える役割だった。小口正持（小石川高）が総合1文を寄せている。指揮を執り大いに励ましてくれた。

手島は、72年7月の長野大会で全学連委員長に選出され、73年まで全力を挙げた。

大学8年目、佐藤廣元行動隊長とともに……。屈折を余儀なくされたであろう、東京から札幌に戻った。卒業の単位を取得するために励んだ。

そこで、67年入学の佐藤廣（飯田高）、全学連行動隊長と出会う。紛争、行動隊長として、巨体に剣道の胴衣をつけ、竹刀を振るっていた。2人は卒業単位を取るために、おなじ身の上の2人は相協力し合った。教養部で落としたドイツ語、体育の単位を取るため親密に連携した。手島は、2006年「佐藤廣君を偲ぶ」葉（2006.10.21）に1文を寄せている。

石狩街道のうら寂しい寿司屋の女将は、手島の中学の同級生と判り、欠食児童の2人は脂を食いまくったという。また2人は、「意を決して」洋物ポルノ映画をともにみた。心のこもった素晴らしい追悼文だった。

5 花も実もある人間像(未完)

敬称略、(25、4.29 第一次稿)

石田嘉幸 元国労組合員・『西暦表記を求める会』事務局

私は手島さんより少し下の世代になります。手島繁一さんと出会ったのは、もう30年以上前、国鉄分割民営化反対闘争の「敗北」を受け、労働者協同組合への関心から、当時手島さんが常任理事を務めていた「協同総合研究所」の様々な会議に参加するようになったからでした。

法政大学の非常勤講師をしている、としか存じ上げないまま、物事について落ち着いて分析する声に重みを感じていました。1993年7月に、花巻市で開催された「労働者協同組合と労働組合」の関係についての全国交流集会に参加した時には、集会終了後、一緒に宮沢賢治ゆかりの地を訪れ、翌日は早池峰山に登りました。あくせくと先を急ごうとする私に対して手島さんはゆっくりと一つ一つの花をじっくり観察しながら泰然と歩を進めて

いました。その折に買った宮沢賢治の描いたミミズクのペーパーウェイトは今も私の机上にあります。

研究所所報の「協同の発見」1993年9月号には手島さんの理事会・委員会報告と一緒に集会への私の感想文も掲載して頂きました。当時一緒に過ごした頃の経験や考えさせられたことは現在の私の基礎のひとつです。

その後、私は研究所からは離れましたが、手島さんとはずっと年賀状のやり取りを続けて頂きました。北海道に戻られての結婚、お連れ合いの御逝去、学生運動の資料まとめなどの仕事のご様子を拝読し、離れていても同じ時代を生きていることの実感を年賀状でつないでいました。

今年は年賀状が遅いなと思っていた頃、弟さんから寒中見舞いの悲報をいただき、慌てWebで検索し、事情をのみ込みました。早池峰山を登ったときの着実な歩みはそのまま続いていて、死は全くその外部から突然訪れたにすぎないのだと思います。あの、彫りの深い顔立ちを研究所の若い友人は50m離れていても手島さんだと分かるよ、と冗談に言っていました。これからも、その面影を忘れることはありません。長い間ありがとうございました。

手島繁一さんの急逝を惜しむ

北大学連第10期委員長越田信

手島さんが急逝されたことを佐々木忠さんからのメールで知りました。

手島さんは、北大学連と全学連の大先輩であり、「北大1969」などの編集委員長を務めた優れた才能の持ち主であり、これからもやり遂げたいことがあったと思われます。たいへん惜しい人材を失いました。

私を手島さんと会ったのは、1973年夏と2019年冬の2回しかありません。

最初は1973年の第24回全学連大会で、壇上で大会決定案を報告する手島さんを大勢の代議員とともに見て聞いていました。厳密には「会った」とは言えないでしょうが、私にとっては北大の大先輩が全学連のリーダーであることに誇りを感じました。

2019年2月には「小室まさのりさんを囲む会」があり、このときは、挨拶程度ではありましたが、話をする機会がありました。

その後、2019年と2021年にメールでやりとりしましたが、じっくりと話をする機会がなかったのは残念でした。

手島さんは第5期の北大学連委員長だったと思うのですが、私が第10期の委員長に選出された時点で、新年度になるとともに北大学連の大会を成立させることができない状態になっていました。これには私にも責任があって、1971年12月の教養部自治会選挙に「教養自治会確立クラス・寮・サークル連絡会議」推薦で執行委員長候補に立候補した私は、「革マル派」候補に「敗北」しました。開票の中盤までは私たちへの票が多かったのですが、終盤の投票箱には、「革マル派」候補の票しか入っておらず、不正選挙の疑いが強い結果でした。翌年も北大教養全学連行動委員会推薦候補が敗れました。したがって、北大学連の最大の課題は、「革マル派」が牛耳っている教養部自治会を民主化して北大学連に結集できるようにすることでした。当時の北大は、丹羽学長の下、多くの大学人の意向に反した大学運営が行われており、院生協議会や教職員組合と共同して大学の民主的運営を求める運動や、筑波大学法案反対・小選挙区制反対・国鉄運賃値上げ反対・健保改悪

反対などにも取り組みましたが、多くの時間を教養部自治会民主化を目指す活動に割いていました。

私が講座配属となり、委員長の任務遂行が難しくなり、日沼さんが委員長代行を務めてくれました。その後、教養部自治委員会議長に全学連を支持するNさんが選ばれ、自治会民主化が期待されましたが、「革マル派」の妨害で、うまくいかなかったようです。

全学連第二十四回大会決定(第1次案)は、手島さんが全学連委員長として、最後に起草した文章だと思われます。その第一章(一)日本学生運動と全学連の輝かしい到達点には、「全学連は、加盟二六二自治会、三五万人、支持結集三〇〇自治会、六十万人を数え、全国の学生自治会の過半数以上を結集し名実ともにわが国の学生運動を代表する唯一の全国組織として発展し、国際的にも国際学生連盟に加盟しその有力な一翼となっている。」と記されています(決定案の掲載は省略)。

手島さんが全学連委員長だった時期が、全学連の最盛期だったように思います。

この全学連の活動を発展させることに寄与したかったのですが、教養部自治会が北大学連、道学連、全学連に結集することを見届けずに大学を卒業したことは、心残りでした。

大学の自主性と研究の自由を奪い、大学を政府の支配下に置こうとする動きが強まる中、大学と日本の民主化に尽力した大先輩の逝去に、謹んで哀悼の意を表します。

佐々木洋

私は故手島さんご夫妻とは世代が違うので、長い交流はありませんでしたが、それでも、心底から屈託のない意見交換ができる友人同士であったと思っています。

「偲ぶ会」のご案内をいただいて、真っ先に思い出されたのが、10年前の2015年8月に手島さんからいただいた「メールの返信」でした。

そこで、この「返信」に言及する拙文を抜粋したものをお送りします。

以下の稿は小島亮さん(社会思想史家)が定年前に編集長を務めていた中部大学の紀要『アリーナ』の2015年18号への投稿の一部抜粋ですが、この中で紹介する「友人からの返信」が、故手島繁一さんからの返信でした。

筆者は、現在『前衛』を読んでいるような、ごく少数の友人に、「不破がメドヴェージェフ兄弟に驚くほどの好意的な評価をしているのはなぜだろう？」とメールでたずねてみた。

筆者よりひとまわり若い世代の友人から、次のような返信がきた。

……不破(あるいはその部下)にメドヴェージェフ兄弟の書くものに当初から信頼があったわけではなく、この間収集した文書資料を読み解いた結果、兄弟の書いたものへの信頼が生まれた、とわたしは推測していますが、そのあたりはかなり微妙かもしれません。好意的に解釈すれば、不破の公的に許される最大級の「自己批判書」と受けとめることもありかな、との思いもあります……

筆者は「自己批判書」とまでは考えが及ばなかったが、不破が、メドヴェージェフ兄弟から何かを学んだ結果としての大変好意ある評価であるのは間違いなからう。

50年ぶりに手島さんに再会して

関 孝雄(1971年理学部地質学鉱物学科卒業)

手島さんは1966年(昭和41年)入学で文類であった。私は1967年入学で理類であり、教養部においてはいわゆるノンポリで、自治会活動には特に関心はなく手島さんとは全く接点はなかった。1968年4月になり、地団研(地学団体研究会)会員の教養部大学院生に援助を受けた地学サークル“シュマの会”に参加し、10月に理学部(地鉱)に移行してからクラス・自治会活動に関わるようになった。1969年に3年目となり11月からは理学部自治会委員長として飯澤理一郎さん(植物学科、その後農学研究科に進み農学部農経の教授、2019年死去)と共に執行部を担った。手島さんは1969年には北大学連の委員長を務め、10月初めの定期大会で腰岡雅昭さんと交代したが、私たちが理学部自治会執行部を担ったのは手島さんが委員長を降りた後であった。よって、私が北大学連加盟組織の代表として、手島委員長と接することは全くなかったが、北大教養部が6月末以降、文系4学部が8月中旬以降「全共闘」一派による長期封鎖を受けてから、封鎖阻止の活動の拠点が理学部になり、そこに北大学連関係者も頻繁に出入りするようになり、その際に姿を見るようになり、手島さんの存在を意識したように思うが、口を交わしたことはほとんどなかったと思う。

ともあれ、手島さんは北大学連委員長を降りると、その能力を買われ、執行委員の立場で全学連(全日本自治会総連合)の中央執行委員会書記局(東京)に詰めることになり、1972年7月からは執行委員長に就任することになった。東京へ出かけた時は、1969年10月?(教育学部4年在籍)で、北大への復帰は1973年4月で、4年が経過していた。この4月に北大に復帰したというのは、私たち北大関係者が知っている佐藤廣さんの偲ぶ会しおりに載った「廣君を悼む」という次の一文から分かる。10月頃までは全学連執行委員長も務めており、東京－札幌を時々往復していたのであろうか。

「・・・・・・その後わたしが全学連の専従として、北大を離れてから数年、彼との付き合いは絶たれた。1973年4月、わたしが卒業単位を取るために北大に戻ってみると、そこに廣がいた。わたしが8年生、彼が7年生。当然ながら、古参学生は他にはいない。そこから、彼との親密な付き合いが始まる。・・・・・・」

北大出身の全学連の委員長といえば、かの60年安保で勇名をはせた唐牛健太郎氏がいたが、彼は手島さんの10年前の1956年に北大に入学し、その1年後に教養部自治会委員長に信認投票で選ばれ、道学連委員長、全学連執行委員に就き、島成郎氏に口説かれて1959年6月の全学連旧14回大会で委員長に選出されている。1960年4月26日、国会前での全学連デモでの警官隊との衝突で逮捕され、10月まで巣鴨拘置所に収監された。その後は北大に復学することなく、所属したブンド(共産同)から革共同へ、田中清玄事務所、沖縄暮らし(徳洲会)、紋別で漁師、コンピューターセールスなど職業を転々とし、1983年3月、沖縄で病没している。一方、手島さんは1973年北大に復学し、法政大学大学院(社会科学研究科)に進み、博士課程を1982年中退後、同大学の非常勤講師、大原社会問題研究所兼任研究員・嘱託研究員、協同総合研究所(協同総研)の常任理事を務めながら、自らが経験した学生運動を含む、協同組合・中小労働組合など、どちらかというと社会の底辺や地域を支える社会運動の調査・研究と、組織化のオルガナイザー・助言者としての役割を一貫して追求してきた。このような歩みは唐牛氏とはきわめて対照的である。

私が手島さんの姿を再び見るのは、佐々木忠さんに紹介されて「北大1969」の編集委員会に加わった2020年1月末の会合からである。実に50年ぶりであった。2006年に東京での仕事に区切りをつけ札幌へUターンしてからは北大を始めとする北海道内の戦後の社会運動の掘り起こしを進めきた実績を買われ、その本の出版に向けて編集長を引き受けた。私は当初は、50年前の北大での出来事や体験については、苦しい思い出しか蘇らず、編集作業に加わることは及び腰であった。しかし、理学部を中心に当時の手持ちの資料を整理し、リストアップするうちにのめり込むことになった。「北大1969」の発行に続き、その編集委員の中の大学院関係者に新たなメンバーが加わり、北大院生協議会の活動についての編集委員会が立ち上がって、2024年9月に花伝社から「北大院生協議会史」の発行となった。私はこの本の編集に携わる中で、特に通史の前半部分を執筆する中で、北海道大学大学院および北海道大学院生協議会（北大院協）の歴史を論ずることは、札幌農学校以来の北大の歴史と密接不可分であり、北大院協の歴史を記述しながら、それは北大の教育・研究の制度・仕組みの変遷も語ることになることを実感した。理院協など理系研究科の役割は院生数の多さも含めて大きなものがあると思っていたが、農学研究科を除くと書き手が少ないことを感じて、理学研究科のみならず、工学・薬学・獣医も含めて網羅的に記述することに努めたつもりである。さらに、以上2つの本の編集に際して、客観的な裏付けとなる文献（資料）の提示が不可欠であるとの思いから年表の作成と共に、その収集・電子化（pdfなどスキャンニング）と一覧表の作成に、多くの方々の協力も得て、努力した。

手島さんを偲ぶにあたり、残された諸資料・本類で手元に集約したものなどから、略歴および執筆一覧をまとめさせていただいたが、彼の北大紛争（闘争）後の50数年の人生（職場・仕事）は私や私たちのそれと共通するものが多いことを実感させられた。すなわち、互いに大学、民間会社、官庁、試験研究機関、労働組合、政党・諸団体専従、弁護士、医師など職場や仕事は様々に違うが、一定の信念・信条やテーマのもとに追及してきた姿勢には共感するものが多く、一言で言えば「お互い、社会のいくばくかの変革と進歩のためにそれなりにがんばったね」ということになる。手島さんは逝ってしまったが、北大・北海道の学生自治会・学生運動の取りまとめについては、残された資料・メモなど見ると、色々追及は進めていたようであるが、公式的には「蒼空に梢つらねて」などに掲載の戦後の運動史年表以外にはない。私たちには、院協史に続き、これらの取りまとめを彼に代わって行う課題が残されているように思える。取りあえず、「北大1969」・「北大院生協議会史」の中で手島さんの提案にもあったとおり、ピラ類・レジメ・資料集などの原本（資料）千数百点をさる5月16日北大文書館へ両編集委員会名で寄贈したことを報告し、偲ぶ一文とする。

惜別 手島繁一さん

東京足立区 川口貞勝

お知らせによれば、全くの急逝だったのですね。惜別の念に堪えません。手島さんとのお付き合いは、吉田万三さんの足立区長選挙の時からだと思いますが、もっと活躍してもらいたかった人です。

枕元には、手島さんが編集された「北大1969」があり、改めて目を通しています。北大闘争に青春をかけてたたかった手島さんの心意気が伝わってきます。手島さん

は私より 10 歳お若いのですが、学生時代の逍遥精神は余り変わらないように思っています。

私は東京生まれ、中央大学卒ですが、学生時代は各大学の校歌や応援歌、逍遥歌をよく歌っていました。一高、三高、早稲田、慶応、明治、北大（都ぞ弥生）などなど。私学だった私は国立大や有名私大へのあこがれだったのかも知れません。

そして 1960 年 3 月、あの「大安保闘争」のさ中に卒業し、就職もせず、映画「戦艦ポチョムキン」（1927 年エイゼンシュテイン）や「松川事件」の自主上映運動を、映画評論家の時実象平氏や山田和夫氏らと 5 年間やってきたのです。

この間、手島さんとの交遊はずっと続いており、彼のロマンと危機に迫る迫る青春闘争もズッと学ばせてもらった次第であった。

人生百年時代、77 歳はまだ青春だったはずです。友人の一人として改めてお悔やみ申し上げます次第です。

<2025. 4. 22 記>

私が北大に入学したのが1967年。2年後、弟が北大に入学した69年の4月10日の入学式は、「クラス反戦連合」を名乗る学生達が突入・占拠により中止。北大紛争が始まりました。手島さんは68年夏から1年間北大学生自治会連合の委員長をされたので、まさに、北大紛争の真ただ中で、北大の民主化のために中心的に活動された。図書館や法学部まで封鎖され勉学の間を失った私達法学部の学生は、主義主張や学年に関わらず法学部の一室に集い、「大学の自治とは」「学ぶとは」など喧々諤々議論・交流しました。法学部を封鎖され、教室が使えず、医学部の階段教室等を転々と移動しての授業や、晴れた日には中央ローンで教官の周りに輪になって座りゼミをしました。ある日、私は法学部を封鎖して立てこもっている学生達に、怒りを抑えられず友人と二人で抗議に行ったことがありました。外に出てきた学生に2人で抗議している内に、短かいゲバ棒で頭をたたかれ、少し腫れて痛かったことを覚えています。今思えば何と無茶なことをしたものです。

当時、学内での集会は多くの学生・教職員が集まり、遠くに演説する手島さんの姿があり、暴力で一方向的に封鎖して勉学の間を奪われた怒りを持つ私達学生に、手島さんの訴えは心に響き心揺さぶるものでした。あの時ほど、学びたいと切望し、どう生きるかを真剣に考えたことはなかったと思います。今から数年以上前、学習会で、数十年ぶりに手島さんにお会いしたのが最後でしたが、私たちにとっては雲の上のような存在だった手島さんの静かな中に尊厳を感じさせる姿が印象的でした。私達団塊の世代が、大学紛争を経験し、多くの市民運動の興隆を経ながら、憲法9条「改正」を許さず、「今」を生き、次の世代へしっかりバトンをつなぐ役割を果たしていることに誇りと希望を感じる「原点」です。ご冥福をお祈りします。

なお、高崎暢は、5月24日のノーベル平和賞受賞した日本被団協代表委員の「田中熙巳さん」講演会の準備のため原稿が書けずお詫び申し上げます。

手島繁一さんへのメッセージ(出欠報告より・到着順)

遠い空の彼方から気持ちだけでも参集します。

小幡 利夫

故人とは1983年以来大原社会問題研究所の仕事などを通しておつきあいをさせていただきました。2019年3月に最後にお会いしたように思います。

最後になりますが、故人のご冥福をお祈りさせていただきます。

佐伯 哲朗

高2のクラスメイトで五人組を形成し、年2回飲み会を開いていたのですが(もっぱら私がセットアップ)、昨年8月に、そのうちの一人が亡くなった(5月に私と手島君の二人が新札幌のスタバに呼び出され、別れを告げられました)ので、12月にそいつを偲ぶ会を開こうと考えていた矢先、6日の新聞に訃報が載ったので、衝撃なんてものではありませんでした。

山下 純一

1969年当時、一般学生であった私は手島さんの姿を遠くから見ただけで特別な交流がありません。

ジャーナリストの手嶋龍一氏(1949年7月11日、芦別生まれ、炭鉱主の子、岩見沢東高・慶応経済卒・元NHKワシントン支局長)が、噂で聞いた手島さんの経歴と重なるのではないかと思います、手島さんに尋ねたことがありましたが、「全く関係がない」とのことでした。

今後、「偲ぶ会」がきっかけとなって小冊子が編集されるときには、北大入学までの手島さんの歩みが少しでも描かれることを希望します。

73年卒・法・小田 耕平

手島君とは教育学部の同じ教育史研究室でしたが学年が離れていたため学生時代は名前を憶えている程度でまったく交流がありませんでした。2011年刊の『蒼空に梢つらねて』と今回の『北大院生協議会史』の編集委員として同じ仕事をするようになったのですがいつも冷静で献身的な仕事ぶりは素晴らしいものでした。北大三部作の全てに編集委員の重責を果たした貢献も忘れてはならないと思います。自らの生き方とも重ねられた新たな視点から学生運動史、社会運動史を構築しようとした理論的な貢献からも学びたいと思っています。

明神 勲

手島さんとは直接的に関わる活動や交流などはありませんでしたが、私が大学に入ったその年から激しさを増した北大の戦いの中で度々お名前を聞くことが多かったことを覚えています。私と同年代や近い年代の当時の仲間が亡くなったとの知らせが届くたびに、あの当時の学生たちの戦いを思い出し、寂しさと同時にちょっと輝かしさも感じています。

1969年北大入学 1975年農学部卒業 大塚 勲

手島さんには、『北大1969』出版記念会の際にお会いし、羽田貴史先生とともに、北大闘争についての聞き取りをさせていただきました。

もっといろいろとお伺いしたかったのに残念です。

ご冥福をお祈り申し上げます。

田中 智子

悲報に接してから、もう半年が過ぎました。

初めて手島さんにお目にかかってから、もう60年近くの歳月が流れました。

当時から輝くリーダーでしたが、以後、益々、重責を担われるようになって行きました。

とはいえ、様々な困難とも格闘されたとお察ししますが、いつも平静でおられたようにお見受けしていました。

東京に来られた時に、何度か北大OBの方々と共に飲み会でお会いしており、またお会いできることを楽しみにしておりました。

ご逝去されたこと、残念無念としか言いようがありません。

しかし、大業を為されたのは間違いありませんし、「大業は心の豊かさの器によって為される」という言葉もその通りだと思う次第です。

慶子さんも待っておられる所に行かれたことでしょう。

心から手島さんのご冥福を祈ってやみません。

江川 朝生

拝啓 若葉の候、皆様におかれましてはますますご清祥のことと存じます。この度は、伯父・繁一のためにお心遣いいただきまして感謝します。

残念ながら私は参加ができません。どうか御学友の皆様で故人を偲んでやって下さい。空の上でとても喜んでいると思います。

敬具

手島氏の妹英子様の娘さん 小川沙都

手島さんのご逝去に際し、ご功労に敬意を表しますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

小川けい子

手島さんのご案内ありがとうございました。

残念ながら出席できません。みなさんによりしくお伝えください。

私は老人ホームに週1回勤務しておりましたが、この3月で終了し、完全に自由な身となりました。自由をたのしんでいます。

舛田和比古

手島様とは、夫が亡くなりましてからもずっと年賀状を頂き、毎年のご活躍を存じておりました。2月に弟様よりのお知らせを受け取り、本当に驚きました。すぐに夫の仏前に報告をいたしました。そして、大切な友人と再会する夫の姿を想像せずにはいられませんでした。

手島様とは大学7年目の1年間、卒業に必要な単位を共に頑張った話を夫から何回も聞かされました。また、奥様も私共が京都在住の折には、訪ねて下さった思い出もあります。

追悼会の出席は叶いませんが、遠くからご冥福をお祈りさせていただきます。

多くのご友人の集まれる会が、和やかな思い出の大切な時間となりますようお祈り申し上げます。

私にまで、ご連絡を下さった事、感謝いたします。 大津市 佐藤廣様奥様 佐藤安子

緑の美しい季節となりました。この度は夫も私も学生の頃から存じ上げております手島繁一さんの訃報をお知らせくださいます心から感謝申し上げます。

思えば2019年3月20日、大原社研100周年に上京された手島さんが、その日葬儀の佐方信一に参加できなかったと、翌日、五十嵐仁、佐伯哲朗、各先生方と一緒に手島先生も我家にお参りに来てくださいました。案内して下さったのが、法政の中林ゼミで一緒だった飯島信吾さんでした。

関係して思いますのは、中林賢二郎先生のゼミです。丁度大学院最終の頃、学院と大学のゼミ生が一緒になり話しあい等や木下家のお泊り会等があり、私も参加しました。佐方信一は旬報社で年鑑（社会労働年鑑）を創っていた関係で大原に参加しており、いつの間にか中林先生の紹介で・・・というわけです。青春時代からの、また後半になってからの（私としては）再会ではありましたが、手島様にも夫への追悼文を書いていただきましたので、参考までにお送りいたします。この本は大勢の方々のお力によるところ大ですが、飯島信吾さんと石井次雄さんに編集を手助けしていただいて出来ました。その飯島さんとは先日話をしました。6月1日に参加予定との事でしたが、私は足と腰を長く患っており、参加できませんので、心ばかりのものをお送りいたします。

勝手なことを書きましたが、これも手島様への心と思って下されば幸いです。

どうぞ実行委員会の皆様によろしく。

尚、本は余分なものです。手島様の文章をコピーしようと思いましたが、共通の友人も多いので、それぞれの文もあり送ることに致しました。心置きいただきたく存じます。

どうぞ皆様、お体には十分気をつけられ、手島繁一様のために偲ぶ会が良い会となりますよう希っております。

2025.4.28 佐方三千枝